

# 日本鉄鋼協会記事

## 春 季 大 会

昭和 36 年度春季大会は、4 月 3 日から 6 日までの 4 日間、恒例により東京において開催され、第 46 回通常総会、第 61 回講演大会、表彰記念特別講演会、鉄鋼技術共同研究会部会報告講演会、懇親会、展示会、見学会等一連の諸行事が引続き行われた。これらの行事には、全国各地から多数会員の参加を得て、いずれも盛会裡に終った。以下その概要を記載する。

**第 46 回通常総会** 4 月 3 日午後 1 時から、早稲田大学小野講堂において開催された。佐藤理事司会の下に開会が宣せられ、初めに浅田会長から挨拶が述べられた後議事に入り、まず理事、監事および評議員の選挙が行なわれた。続いて 35 年度事業報告、収支決算および財産目録の件並びに 36 年度事業計画および収支予算の件が一括議題に付せられ、芝崎理事より事業について、秋田理事より会計についてそれぞれ説明があり、また石原監事より監査報告があつて採決に入り、何れも満場一致可決された。続いて内山、知崎両選挙管理委員から、理事、監事および評議員選挙結果の報告がなされた。この後で一旦休憩、その間別室において臨時理事会を開き、副会長の互選を行つたが佐藤知雄、俵信次両理事が副会長に選任された。よつて総会を再開、佐藤、俵両新副会長からそれぞれ就任の挨拶があつて、総会の議事を終つた。

次に名誉会員推挙式が行なわれ、浅田会長より三島徳七、山岡武両氏に対し、満場拍手の裡に名誉会員推挙状が贈呈された。

引続いて表彰式に移り、下記受賞者諸氏にそれぞれ表彰状並びに賞牌、賞金が授与され、午後 2 時滞りなく総会の幕を閉じた。

服部賞(賞牌および賞金)	里井孝三郎君	渡辺義介記念賞	井上誠君	上杉年一君	大平一郎君
香村賞(〃)	菖蒲正俊君	(賞金)	河野勝三君	河村寛君	熊沢淳君
俵賞(〃)	森一美君		小林剛四君	芹田勇君	高椋正雄君
渡辺三郎賞(〃)	横山均次君		塚本富士夫君	林敏君	平本清房君
渡辺義介賞(〃)	角野尚徳君		前原繁君	山外次郎君	山本大作君

総会における浅田会長の挨拶



**第 61 回講演大会** 4 月 3 日、4 日、5 日の 3 日間に亘り、早稲田大学内において開催された。第 1 日は参会者一同が参集した第 1 会場において最初に浅田会長より開会の辞が述べられた後、5 会場においてそれぞれ講演が開始された。すなわち第 1 日に 34、第 2 日に 70、第 3 日に 70、合計 174 に上る研究発表講演が行なわれたが、聴講者は 400 名を超える多数で、講演の後では活潑な質疑応答が交わされ盛会であつた。

**表彰記念特別講演会** 4 月 3 日午後 2 時から早稲田大学小野講堂において、表彰記念のための特別講演会が開催され、このたびの総会で表彰された下記諸氏からそれぞれ有益にして興味深い講演が行われた。

住友金属工業小倉製鉄所における高炉、平炉操業および線材生産技術の改善促進について

特殊線材の製造技術の概況について

鉄鋼製錬反応における動的状態

ゲージ鋼について

日本鉄鋼業の経営合理化の方向

服部賞受賞者 里井孝三郎君

香村賞受賞者 菖蒲正俊君

俵賞受賞者 森一美君

渡辺三郎賞受賞者 横山均次君

渡辺義介賞受賞者 角野尚徳君

**鉄鋼技術共同研究会部会報告講演会** 本年度より初めて標題の講演会を開催することとなり、4 月 4 日午前 11 時から早稲田大学講堂において開始された。講演題目並びに講演者次の通り、

開会の挨拶

第二次大戦後 10 年間における本邦特殊鋼製造技術の展望

鉄鋼業における計測の展望

鉄鋼業の用水使用の現況

幹事長 山岡武君

特殊鋼部会長 石原善雄君

計測部会長 菊池浩介君

調査部会長 三井太信君

**懇親会** 本会の大会と時と所を同じくして春期大会を開催している日本金属学会と合同で会員懇親会を開催することとなり、4月3日午後6時から早稲田大学校友会館で実施された。恒例により敬老の意を表するため、両会の長老諸先輩を来賓として迎え、また表彰者諸氏を招待し、両会の役員並びに会員の参会者を併せて200名に上る出席者があつて大いに盛会であつた。初めに浅田鉄鋼協会々長並びに大日方金属学会会長の挨拶があり、次いで長老金子恭輔博士が両会の隆昌を祝して乾杯した。後宴に移り、互に交歓を重ね和気藹々の裡に午後7時半散会した。当日来賓としてお招きした先輩各位は次の通りであつた。(順序不同)

金子恭輔氏、村上武次郎氏、黒田泰造氏(欠)、石原米太郎氏、松下長久氏(欠)、浅田長平氏、斎藤三三氏、松縄信太氏(欠)、真島正市氏(欠)石原寅次郎氏(欠)、玉置正一氏(欠)、松田孜氏(欠)、小林子之輔氏(欠)、藤田俊三氏、斎藤省三氏(欠)、田所芳秋氏(欠)、田丸莞爾氏、庄司彦六氏(欠)、角野尚徳氏、室井嘉治馬氏



懇親会開催前の早稲田大学校友会館庭園での交歓のひとつ

**展示会** 日本金属学会との共催で4月3日から5日まで商品の展示会が、早稲田大学8号館において開かれた。旭硝子株式会社ほか53社の出品に係る多数の機械、計器、新製品等が所狭き許りに展示、紹介され、参観者が相續いで入場、賑わいを呈した。

**見学会** 4月6日日本金属学会と合同で見学会を行なつた。当日両会の見学参加者600名は、12班に分かれ、日本原子力研究所東海研究所はじめ各工場、研究所など25箇所の見学を行なつた。また別に4日の夕刻より50名の一行は東京タワー、NHKスタジオ、歌舞伎座等の夜の東京観光を行なつた。

**支部長会議** 日時：4月4日(火)12:00~14:00. 場所：早稲田大学校友会館. 出席者：浅田会長、森永(北海道)、青木(東北)、橋浦(北陸)、佐藤(東海)、足立(関西)、和田(九州)各支部長、支部理事ほか9名。

議事：Ⅰ. 本部よりの報告. Ⅱ. 各支部の事業運営状況報告. Ⅲ. 本部支部間の連絡について. Ⅳ. 本会の事業運営その他本会発展に関する意見. 議事を終つて懇談に移り、意見の交換を行なつた。

**第2回理事会** 日時：4月18日(火)午後4時より. 場所：協会会議室. 出席者：俵副会長ほか17名。

報告事項 Ⅰ. 編集委員会に関する件. Ⅱ. 企画委員会に関する件. Ⅲ. 春季大会に関する件. Ⅳ. 鉄鋼・金属両会連絡懇談会に関する件. Ⅴ. 特別講演会開催に関する件. Ⅵ. クリープ試験に関する件. Ⅶ. 大河内記念賞授賞に関する件。

協議事項 Ⅰ. 理事の職務分掌に関する件. Ⅱ. 常務委員委嘱に関する件. Ⅲ. 定例理事会、編集委員会、企画委員会開催期日の件. Ⅳ. 北海道大学理学部金属化学科設置要望に関する件. Ⅴ. 米国AIMEより Hunt 賞贈呈に関し申し出の件. Ⅵ. 3月中収支決算の件. Ⅶ. 3月中入退会その他会員異動の件。

**第2回編集委員会** 日時：4月25日(火)午後5時より. 場所：協会々議室. 出席者：佐藤理事ほか17名。

報告事項 Ⅰ. 第4号完成および第5号完成予定について. Ⅱ. 投稿論文の他誌発表について. Ⅲ. 溶接学会賞について. Ⅳ. 掲載論文について. Ⅴ. 表彰記念特別講演会原稿依頼について. Ⅵ. 厚板分科会報告書について.

協議事項 Ⅰ. 第4号の講評. Ⅱ. 論文審査報告. Ⅲ. 第6号掲載論文の選定. Ⅳ. 寄稿規程の改正について. Ⅴ. 中国四国支部講演会講演概要掲載について. Ⅵ. 抄録原稿について. Ⅶ. 欧文誌編集について。

## 表 彰 者 表 彰 理 由 書

### 渡辺義介賞受賞者

八幡製鉄株式会社代表取締役副社長  
八幡製鉄所長兼堺建設本部長

工学士 角 野 尚 徳 君

#### 鉄鋼事業の運営ならびに技術の進歩に対する貢献

君は大正7年7月九州帝国大学工科大学冶金科を卒業し、ただちに当時の官営八幡製鉄所に入所、爾来42年間の永きに亘り一意専心わが国鉄鋼業発展のために尽力し今日に至った。この間の業績は各面に亘り枚挙に暇がないが、その主なるものを挙げれば次の如くである。

昭和21年5月八幡製鉄所長に就任した当時は終戦後の混乱した時期であり原料、資材などの供給不足、労働事情の緊迫等々操業も一時困難な状態に遭遇したにもかかわらず、よく強力な増産対策を推進して鉄鋼生産に邁進し、疲弊した国民経済の復興に多大の貢献をなした。つぎに昭和25年4月からは八幡製鉄株式会社の副社長として戦時中からの酷使により老朽化した各種設備の更新と近代化を図るための設備合理化に着手したのであるが、これは鉄鋼業のみならず他産業の設備合理化計画に対する先駆の役を果たしたもので、その後のわが国鉄鋼業が単に内需のみならず輸出面においても格段の競争力を有し、最近の貿易自由化においても比較的堅実な立場に立ちうることは、ひとえにその礎石に負うところが多いものといえる。とくに昭和31年4月からの戸畑地区における海面埋立て、土地造成にはじまる銑鋼一貫の新製鉄所建設は、合理的な工場配置と最新設備による鉄鋼生産の高能率化を図つたもので、その斬新な管理態勢の採用と相俟つてわが国鉄鋼界に革新的な示唆を与えたものである。この間純酸素転炉操業の経済性や品質の優良性などが問題とされるやいち早くその試験、建設に着手し、同転炉採用の先鞭をつけるなど業界の技術的進展にも多大の寄与を果たしたのである。これら一連の設備建設及び合理化はひとり同社の発展を図るに止まらずわが国鉄鋼業界の世界鉄鋼市場における飛躍的発展と国民生活水準の向上を帰結したもので、生産責任者として同君の活躍は誠に目覚ましいものがあつたといえよう。

以上のほか昭和9年から17年までの9年間母校九州大学工学部の講師として後進技術者の指導に尽力するとともに昭和25年9月には本協会九州支部長、さらに続いて昭和31年度には本協会の会長に就任、その円満高潔の人格をもつて日本鉄鋼業界に重きを加えた功績はきわめて大なるものがある。よつて君は日本鉄鋼協会表彰規程第7条の規定により渡辺義介賞を受ける資格十分であると認める。

### 服部賞受賞者

住友金属工業株式会社取締役小倉製鉄所長

工学博士 里 井 孝三郎 君

#### 高炉、平炉技術および線材生産技術の 進歩発展に対する功績

君は昭和8年九州帝国大学冶金科を卒業、住友金属工業株式会社に入社して以来、主として製鋼現場の技術者

として平炉作業に従事、戦前戦時中を通じて同社製鋼所の酸性平炉による特殊鋼の熔製、和歌山製鉄所の100t塩基性平炉における鋼管、外輪材などの製造に当り作業の改善と品質の向上に努力した。また終戦後の混乱した時代に鋼管製造所、和歌山製作所の塩基性平炉操業の復興に苦心し、現場管理者としてよくその責任を果し、同社平炉操業法の今日における確固たる基礎を築き上げた。

昭和28年小倉製鉄所製造部長に任ぜられて以来今日にいたるまで、同所の技術および生産部門を指揮していちじるしい技術の向上と生産性増強に対して常に適確な判断を以つて指導的役割を果たしている。とくに小倉製鉄所の輝き業績として技術的に高く評価されている「自溶性焼結鉄の製造法とその100%使用による高炉操業」の実施は、コークス比の低下のみならず生産性向上に驚異的成果を収めた。また従来の全塩基性平炉のアーチ式吊天井構造を同所独自の考えにより根本的に改良し、垂直に全天井煉瓦を懸垂するいわゆるブロック式築造方法を同君の指導の下に考案して、築造方法の簡易化、築造時間の短縮および工数の節約を計り、稼働率、生産性の向上と原価の低減をはかることができた。なお、さきに同所に計画設置された650kgリムド鋼塊よりの300kgコイル2コ取りの全連続式線材設備は世界中でもつとも早い伸線速度(30m/s)で、設置完成後早期に仕様通りのフル操業を行ない相当量を海外に輸出し、その品質の良好と相俟つて世界の耳目を集めているのは主として同君の指導の賜である。

以上のごとく君の高炉、平炉技術および線材生産技術の進歩発展に対する功績は顕著であつて、日本鉄鋼協会表彰規程第3条の規定により服部賞を受ける資格十分であると認める。

### 香村賞受賞者

株式会社神戸製鋼所取締役鉄鋼事業部長

工学士 菖 蒲 正 俊 君

#### 特殊線材の製造技術の確立

君は昭和10年3月京都帝国大学工学部採鉄冶金学科を卒業し、ただちに株式会社神戸製鋼所に入社、平炉製鋼作業に従事して高級炭素鋼、溶接棒用芯線などの特殊線材の製鋼技術を担当、とくに高級炭素鋼についての酸性平炉操業技術に画期的な進歩をもたらした。さらに溶滓式ガス発生炉の工業化に成功し、溶接棒用線材品質の改善と安定に寄与し、また全塩基性平炉を率先採用して高級炭素鋼の製造に貢献した。

昭和27年5月製鉄部次長に進み、同時に鋼材課長を兼ね特殊線材の圧延技術の改善に努め、またあらたに分塊圧延設備を増設して製品品質の向上を計つた。昭和30年1月製鉄部長に累進し、高級線材専用圧延設備を企画設置して特殊線材品質について欧米の水準に伍する斯界の最高品たる声価を得させ、従来まつたく輸入に依つていた堅坑用並びに建設工事用ロックドコイルワイヤーロープに使用する異形線材の圧延に成功した。昭和33年11月取締役に就任、鉄鋼事業部長として経営に当り、昭

和 34 年 1 月灘浜工場に 1 号高炉 (650 t) の建設稼働を推進し、銑鋼一貫による特殊線材および特殊鋼材の製造方式を確立した。昭和 35 年 8 月協浜工場に本邦最初の 60 t 電気炉を企画設置し、溶銑操業による電炉製鋼技術の確立および高率の溶銑配合による鋼材品質の向上改善を計った。さらに昭和 35 年 9 月灘浜工場に全連続式の第 4 線材工場を企画設置して本邦における特殊線材の製造に画期的な進歩をもたらした。

以上のように約 25 年の永きにわたりいろいろの発明考察を行ない特殊線材の製造技術水準の進歩向上に寄与した功績は多大である。よつて君は表彰規程第 4 条により香村賞を受けるに十分なものと認める。

### 俵 賞 受 賞 者

茨城大学工学部助教授

工学博士 森 一 美 君

スラグ塩基度の新しい尺度および  
両性酸化物を含むスラグの塩基度(論文)

君は昭和 22 年 9 月東京大学第二工学部冶金学科を卒業し、東京大学助手を経て、茨城大学工学部助教授として奉職し現在にいたっている。

鉄鋼製錬においてスラグの塩基度は作業管理上重要な要因であり、鉄冶金学でも十分にその本質を理解することが要望されている。君は「鉄と鋼」第 46 年第 4 号に発表された標記論文において、複雑スラグに適用できる新しい尺度を提唱したが、スラグ中の三価鉄イオンの全鉄に対する濃度比は一定の酸素分圧下で塩基度とともに増大する性質を巧みに利用し、二元系および三元系スラグにつき広範な実験を行なつて容易に使用できる実験式を提出している。とくに、溶銑炉製銑法や電気製銑法で関心の深いアルミナおよび酸化チタンの両性的性質は、著者の定義によつてあたかも電解質水溶液における場合のごとく明快な尺度で理解することができる。これは従来の定性的な解釈を数歩前進させたもので、理論的にも実験的にもきわめて困難な領域を開拓した独創的研究といえる。論文「スラグ塩基度の新しい尺度および両性酸化物の塩基度」は「鉄と鋼」第 46 年に掲載された論文でもつとも有益な論文と審定された。よつて君は表彰規程第 5 条の規定により俵賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡 辺 三 郎 賞 受 賞 者

東京工業大学教授

工学博士 横 山 均 次 君

工具鋼およびゲージ鋼の研究

君は昭和 5 年東北帝国大学工学部金属工学科卒業後ただちに東京工業大学に勤務し、昭和 16 年教授となり現在にいたっている。

この間君は、精密機械工業上に用いられるいろいろの工具鋼の熱処理に関する問題について研究した。すなわちゲージその他の精密工具または機械部品類の熱処理に伴う変形の防止、軽減を目的をもつて、自硬性を有するいろいろの鋼について基礎的研究を行ない、さらにその結果に基づいていろいろのゲージの試作研究をも実施し、熱処理の方法と実際工具としての精度との関連について追求した。また工具鋼の靱性に関する研究と

しては、各種の工具鋼の焼入、焼戻しなどの熱処理状態における靱、脆の程度を判定する基準を求めることに努力した。

以上のとおり、君の工具鋼およびゲージ鋼の進歩発達に対する貢献は顕著であつて、表彰規程第 6 条の規定により渡辺三郎賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡 辺 義 介 記 念 賞 受 賞 者

八幡製鉄株式会社八幡製鉄所戸畑製造所技術部  
製銑技術課長

工学士 井 上 誠 君

大型溶銑炉の設計ならびに操業に関する功績

君は昭和 16 年 3 月東京帝国大学冶金学科卒業、ただちに日本製鉄株式会社入社、八幡製鉄所勤務、22 年 12 月第二製銑課洞岡溶銑炉掛長、27 年 1 月冶金管理課製銑管理掛長、28 年 4 月原料調査課長、31 年 9 月第二製銑課長、32 年 10 月臨時戸畑企画部部員、34 年 4 月製銑技術課長を歴任し今日にいたっている。

この間戦後混乱期における溶銑炉の生産確保、溶銑炉標準作業の確立、原料調査、管理業務の確立による製銑原料の円滑な需給調整の実施、さらに第二製銑課長として 1,000 t 溶銑炉標準作業の確立、生産管理に大きな貢献をなし、とくに洞岡第二溶銑炉における全自溶性焼結銑使用による操業試験は今後の溶銑炉操業に大きな指針をあたえた。さらに八幡製鉄株式会社第 2 次合理化計画の一環としてわが国最大でしかも最初の 1,500 t 大型溶銑炉の建設が進むや、その企画担当者として設計、建設、操業、さらに新しい組織の基本を設立し新しい大溶銑炉工場を新しい構想をもつて作業を開始させ、その作業成績はまったく驚異すべきもので、焼結工場、コークス工場を含め大型溶銑炉標準作業をここに確立したものである。この間昭和 35 年 2 月から約 2 カ月間今後さらに大型化する溶銑炉の設計ならびに操業の参考とするため欧米各国の大型溶銑炉を調査し、戸畑第三溶銑炉、さらに今後の大型溶銑炉の設計、操業に大いに益するところがあつた。なお、今後大型焼結工場の稼働による自溶性焼結銑の高率配合によつて大型溶銑炉の高効率化操業が期待される。

以上のごとく、君は、大型溶銑炉の設計ならびに操業に対する功績が多大であつて表彰規程第 8 条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡 辺 義 介 記 念 賞 受 賞 者

山陽特殊製鋼株式会社取締役技術部長

工学博士 上 杉 年 一 君

軸受鋼の製造および研究に対する功績

君は昭和 20 年東京帝国大学第一工学部冶金学科を卒業、昭和 24 年山陽特殊製鋼株式会社に入社、研究課長、製造部次長、技術部長を経て、昭和 34 年取締役に就任今日にいたっている。

この間君は、軸受鋼の品質、歩留など生産技術の向上と軸受工業の発展に努力した。すなわち下注造塊法の工業化により鋼塊表面疵および地疵を減少せしめ、また本邦最初の連続焼準焼鈍炉により軸受鋼の微細球状化焼鈍の工業化に成功し、国産軸受が世界水準を凌駕することを立証した。また従来未解明であつた高炭素鋼(主として

軸受鋼)に発生する白点の原因は、水素の圧力によつて最初炭化物が破断することにあることを立証し、炭化物破断による各種欠陥の解明を行ない、脱水素処理法を確立した。

以上のごとく、君の軸受鋼の製造および研究に対する功績は多大であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡辺義介記念賞受賞者

東芝製鋼株式会社取締役

工学士 大平 一郎 君

#### 電気炉操業に対する功績

君は大正14年九州帝国大学冶金科卒業後、海軍に入社したが終戦後東芝製鋼株式会社に入社、昭和26年取締役となり現在にいたつている。

海軍では終戦までの20年の間、2カ年間の独国駐在と大戦末期の3カ年の海軍艦政本部勤務を除いては、呉海軍工廠製鋼部に勤務し、電気炉による特殊鋼の溶製と、砲身および弾丸の焼入に終始した。この間当時としては超大型の30t電気炉(最大40t)3基の建設と、その溶製や、わが国で初めて高周波炉による鋼の溶解を手がけまた白点の解明に貢献するなど、電気炉による特殊鋼の溶製には功績顕著なものがある。戦争中期に米国メスタ製の焼入ロールの入手困難にさいしては、協同者とともに特許となつている熱処理方法により、メスタ製にも劣らぬロールの製造に成功した。終戦後は現在の東芝製鋼に移り、多年の経験を生かして現在にいたるまで、製造現場を担任し、同社の製鋼技術基盤の確立と、指導に努め、低合金鋼の溶製などにも品質改善に功績多大である。

よつて君は表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡辺義介記念賞受賞者

株式会社日本製鋼所室蘭製作所

鍛錬課長兼鍛造課長

河野 勝三 君

#### 大型鋼材の鍛錬技術改善に対する功績

君は昭和16年3月、米沢高等工業機械科を卒業後ただちに日本製鋼所に入社、室蘭製作所鍛錬課に勤務、鍛錬課主任を経て昭和32年鍛錬課長兼鍛造課長となり今日にいたつている。

その間、専ら大型鋼材の鍛造に従事し極めて積極的、研究的にしかも周到、綿密な準備のもとに大型鍛造作業法の改善並びに作業の能率化に献身的な努力を傾け、かつ、顕著な実績を示した。その主なるものを挙げれば、熱間鍛造中における鋼材内外部の温度分析について考察し、昭和34年10月本協会においてこれを発表した。超大型高級鍛鋼材である発電機用ローターシャフトの内部空隙の鍛圧着には、現場作業に対する鋭い考察からもつとも効果的、かつ生産的な鍛錬方法を実施し、高度の要求品質の確保に多大の功績を示した。また大型鍛鋼クランクアームの鍛造においては、コストを低下させ、品質を従来法あるいは以上に保証し得る合理的製造法を確立し、現下の要請に応えた。さらにいち早くマンプレーターをハンマープレスに活用して、鍛造作業の安全性と経済性を高め、もつて斯界にその先鞭をつけたことも大

きな業績の一つである。

以上のごとく君は大型高級鍛鋼材の改善進歩に貢献するところ多大であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡辺義介記念賞受賞者

東洋鋼板株式会社本社計画課長

河村 寛君

#### ブリキ板製造設備の合理化計画の立案並びに推進に対する功績

君は昭和16年広島高等工業電気工学科を卒業、陸軍航空本部部員を経て、昭和21年東洋鋼板株式会社に入社、昭和34年5月本社計画課長となり現在にいたつている。

東洋鋼板入社以来企画部門を担当し、ブリキ板製造設備に関して絶えず世界の技術動向に着目し、わが国の特殊性を考慮した独自の合理化案を立案推進しその技術水準を世界水準に比肩しうるまでに向上させた。

すなわちブリキの品質向上には焼鈍用保護ガスの改善が緊要なことを認め、昭和29年には国内各社にさきがけHNXタイプガスの前身NXタイプガスを採用し、完全光輝焼鈍を進歩させた。また、わが国のブリキ、薄板類の需要増大の傾向を分析して生産増強計画を立て、昭和34年にはわが国単純圧延メーカーとしては最初の5スタンドタンデム冷間圧延機を完成した。これに付設されたX線自動厚み制御装置はブリキ薄板類の品質向上、生産安定に成果を挙げたがその安全運転には君の電気工学の造詣が与つて力があつた。さらに同年12月には高速電気メッキ装置を完成、現在連続焼鈍設備および2スタンドタンデム調質圧延機の建設が進められているが、これにも同君の卓越した技術思想が採用されている。さらに君は、単純圧延メーカーとしてそのエネルギー源に石炭を採用していたことに検討を加え、液化石油ガスを燃料源として利用することを提案し、昭和36年1月以降液化石油ガスへの転換が行なわれた。

以上のごとく、君のブリキ板製造設備合理化計画の立案推進に対する功績は多大であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡辺義介記念賞受賞者

富士製鉄株式会社川崎製鋼所副課長

工学士 熊沢 淳君

#### 品質管理を中心とした各種工場管理方式の導入普及および研究に対する功績

君は昭和13年日本大学工学部機械工学科を卒業後、ただちに日本製鉄株式会社に入社、富士製鉄技術部能率課長、標準課長を歴任、昭和34年同社川崎製鋼所副課長となり現在に至つている。この間君は昭和24年以来工場管理部門に関与し、わが国鉄鋼技術において欧米との較差の大きかつたこの分野での遅れを取戻すために多大な努力を続けてきた。すなわち品質管理の導入、普及においては鉄鋼協会品質管理部会の発足を企画し、幹事として今日に至り、その他関係機関の指導者として活動が続けている。熱技術の面においては鉄鋼協会熱経済部会の幹事として、熱管理、計器、オートメーションの分野にそ

の推進力となつた。IE分野においては鉄鋼連盟IE研究会幹事としてその発足より協力した。標準化の面においては工業標準調査会専門委員としてJISの制定に参与し、他方産業合理化審議会プロセスオートメーション専門委員としてわが国オートメーションの将来に関する審議に参画し、また工業技術協議会エネルギー技術部会委員としてエネルギー消費の問題の審議に参画した。その他日本科学技術連盟、能率協会、規格協会、熱管理協会、MTM協会等管理部門の発展と充実に関する部門には広くその推進力となつている。その主たる業績は「管理組織の研究」「統計的品質管理の導入普及」「作業標準の体系化」「品質管理方式の確立」「ORの導入普及」「機械計算化」「設備保全の体系化」「色彩調節の設定」「規格の制定」「鉄鋼製造設備のオートメーション化」「IEの組織化」「MTMの応用」「分析の標準化」「採取検査方法の設定」等々非常に広範囲にわたるものである。特に「鉄鉱石サンプリング法のJIS化」は諸外国においても高く評価されており鉄鋼各社に益するところ多大である。また昭和32年には鉄鋼技術共同研究会より欧米に派遣され、品質管理を中心とした各種管理方法の調査研究を行いその報告を発表し、更にその徹底のためにつくしている。富士製鉄株式会社が品質管理面で第1回デミング賞を受賞し、引続き通商産業大臣賞、工業技術院長賞、熱技術の面で通商産業大臣賞、通商産業局長賞、安全で労働大臣賞を受賞しているのも君の功績によるところ大である。特にこれら管理業務に対し若い技術者を大量に育成された君の努力は高く評価される。

以上のように君は品質管理を中心として各種工場管理の導入普及および研究に対する功績が多かつて渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

#### 渡辺義介記念賞受賞者

尼崎製鉄株式会社呉製鋼所生産部製鋼係長

小林 剛 四 君

#### 電気炉製鋼技術の向上に対する功績

君は大正15年岡山県立工業学校を卒業後、呉海軍工廠に入廠、その間海軍技手養成所を卒業、終戦後同工廠の施設により操業を開始した尼崎製鉄株式会社に入社、昭和30年6月呉製鋼所製鋼係長技師となり現在に至つている。この間君は引続き34年余の長期にわたり終始一貫製鋼作業に従事して技術の研鑽に努力し、電気炉製鋼技術については斯界有数の技術者と認められている。

君は尼崎製鉄株式会社に入社以来電気炉熔解作業の責任者として作業に従事し、その非凡な技術と円熟した人格を以て日夜後輩の指導育成に当り、上司、同僚、部下から尊敬されている。特に30t電気炉による超大型船舶用鋼品の製造作業に従事し、わが国造船界にも貢献し、また小型圧延用鋼塊の品質向上に努力している。

以上の如く君は、電気炉製鋼技術の向上に対する功績が多かつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

#### 渡辺義介記念賞受賞者

富士製鉄株式会社釜石製鉄所製鉄部長

芹 田 勇 君

#### 溶鉱炉操業および焼結作業の能率の向上

君は、昭和8年3月明治専門学校冶金科を卒業後直ち

に官営八幡製鉄所に入所、日鉄釜石製鉄所、広畑製鉄所、満洲製鉄本溪湖支社を経て富士製鉄本社技術部管理課長、製鉄管理課長を歴任、33年2月釜石製鉄所製鉄部長となり現在に至っている。この間終始わが国製鉄作業の向上に献身してきたが特に釜石製鉄所製鉄部長就任後、同所の溶鉱炉操業および焼結作業の能率の向上は顕著である。

すなわち同所における平炉鉄のコークス比は昭和33年平均0.632、昭和34年平均0.556、昭和35年上期0.579と長期にわたり低下を見ている。特に昭和34年7月の0.533はわが国最高の水準を示した。また、鋳物鉄についても同様、昭和33年平均0.728、昭和34年平均0.649、昭和35年上期0.657と長期にわたりコークス比が低下しており、これは不断の研究と旺盛な実行力により高炉操業の安定化を進めた成果であり、わが国高炉操業がその後急速な向上を遂げるようになったことの推進力としての貢献は大きい。また同所の平炉鉄Si%は昭和33年平均0.71、昭和34年平均0.47、昭和35年上期0.43と長期にわたりその低下をはかり製鋼作業成績にいちじるしい貢献をなした。一方、ダクタイル鉄を始め各種特殊鉄の吹製技術を確立し、また鋳物鉄全体につきTiその他の有害元素の減少、品質のバラツキの低下に努力した。昭和33年7月以降第2焼結工場で石灰焼結を生産し始め従来の960t/日の生産に対して原料配分、燃料、水分の適正な管理、原料装入方法の合理化、成品粒度の管理等の努力により焼結時間の短縮、生産率のいちじるしい向上を示し、1,200t~1,300t/日の優良焼結鉄を生産をなした。その生産率はグリナワルド焼結機としてはわが国最高水準の約20t/m<sup>2</sup>Dで一般の10~15t/m<sup>2</sup>Dを大巾に上回つて一つの指標となつた。

以上の如く君は製鉄および焼結作業の能率向上に対する功績が多かつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

#### 渡辺義介記念賞受賞者

住友金属工業株式会社和歌山製鉄所技術部長

工 学 士 高 椋 正 雄 君

#### 製鋼技術の進歩改善に寄与

君は、昭和13年3月九州帝国大学工学部冶金学科卒業後直ちに住友金属工業株式会社入社、製鋼所第一製鋼工場長代理、和歌山製造所製鋼課長、製造部次長を歴任、昭和33年1月同所技術部長となり現在に至つている。この間製鋼現場の技術者として作業に従事、戦時中は酸性平炉による特殊鋼の製造、戦後は塩基性平炉による外輪、継目無鋼管、帯鋼等の鋼塊製造にあたり、作業の改善と品質の向上に努力した。昭和27年いちはやくイメージンパイロメーターを現場作業に取り入れ、昭和28年重油専焼100t平炉建設に際して燃焼自動制御方式を採用、両者相俟つて製鋼作業を勤の作業から科学的作業として確立した。また炉体構造並びに耐火物の品質、使用方法の改良に努力し、能率の向上、生産力の増大に多大の成果をあげた。昭和32年同社合理化計画の一環として製鋼設備を増強するにあたり、酸素を大量に使用する場合の従来平炉の欠点を除去し得る構造としてわが国で

始めてメルツペーレンス型平炉を採用した。すなわち、能率の向上、煉瓦原単位の低下を計ると共に、上部炉体煉瓦積の起重機による吊替修理を計画、修理時間の短縮、稼働率の向上、修理時の熱間重労働の削減を計った。また酸素によるダストの蓄熱室閉塞防止策として 2 pass checker を採用、第一室は目を大きくして dust chamber を兼ねしめ、下部より操業中に排出可能な構造にした。昭和34年7月より順次2基を完成、操業に入つたが、本炉は同型式の平炉として世界最大であり、またかかる大型炉における冷鉄操業は世界にその例を見ないところであるが、熔鉄操業に劣らぬ画期的成果をあげた。稼働より次回大修理を含めた約1年間、能率、稼働率、煉瓦原単位に極めて良好な成績をあげ、将来の平炉構造に対し有益な示唆を与えた。本炉は起重機能力、建屋強度の関係で二股樋を採用したが、わが国ではかかる大型炉には初めての試みである。

以上の如く、君の平炉製鋼技術の進歩改善に対する寄与は多大であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡辺義介記念賞受賞者

日本金属工業株式会社本社技術部次長

工学士 塚 本 富士夫 君

ステンレス鋼の製造技術の改善ならびに  
研究に関する功績

君は、昭和16年12月東京帝国大学冶金学科を卒業後海軍に入り、呉海軍工廠、海軍技術研究所に勤務、ガスタービン用耐熱合金の研究に従事、終戦後昭和21年日本金属工業株式会社に入社、製鋼課長、技術課長を経て、昭和33年本社技術部次長となり現在に至つている。

この間、君はステンレス鋼の製鋼技術の改善並びに関係研究に努めたが、特に昭和26年わが国最初の弧光式電気炉による酸素製鋼に成功し、超低炭素ステンレス鋼の工業化を可能にし、併せてステンレス層の大量使用、原料の制限緩和により国産ステンレス鋼の量産体勢を築いた。造塊作業にもストツパー方式、トップヒート方式などステンレスの特性を生かしつゝ常に積極的改善を重ねた。終戦時不完全かつ小規模であつたステンレス製鋼技術が今日の如く進歩発展した成果に対し君の寄与した功績は大きい。昭和28年より技術課長として研究活動に従事し、超低炭素ステンレス鋼、安定化ステンレス鋼、高ニッケル高クロムステンレス鋼、高モリブデンステンレス鋼の材質改善を進め、標準製品化を援助、なかんずく耐熱合金に対しては航空機工業、原子力工業用材料の研究を通して業界にその成果を発表し、本社技術部次長の職にあつてもより掘り下げた耐熱鋼の基礎研究を直接担当して現在におよんでいる。さらに技術課長当時ステンレス鋼の製造技術に統計的手法を試み、日常の生産作業の標準化の基礎を築いた成果は注目すべきものである。またこの間に欧米ステンレス業界を数回にわたつて調査し、各種技術の向上に努め、さらに遠心铸造、真空溶解の実用化を図つて量産技術を確立し、原子力工業分野の技術水準の向上に寄与した。

以上のごとく君のステンレス鋼の製造技術の進歩発展に寄与した功績は多大であつて、表彰規程第8条の規定

により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡辺義介記念賞受賞者

日本鋼管株式会社川崎製鉄所製鉄部長

工学士 林 敏 君

高炉操業技術の向上とその標準化に対する功績

君は、昭和13年3月東京帝国大学工学部冶金科卒業後直ちに日本鋼管株式会社に入社、川崎製鉄所製鉄課長を経て昭和34年7月製鉄部長となり現在に至つている。

君は昭和13年入社以来、今日に至るまで一貫して高炉操業に専念し、わが国における、製鉄技術の向上に努め、その生産性コークス比を大巾に改善し幾多の新技术を實用化し、指導的な地位を確立した。すなわち、操業成績の向上に対する原料予備処理の重要性に着目して、研究および現場実験を続け、破碎、篩分の設備を整備し、また高炉装入直前における焼結鉄の再篩分を実施する一方、それらの効果を解析して装入鉄石整粒の作業基準を確立した。また戦前より、トーマス鉄吹製に対して燐鉄石配合による含石灰焼結鉄の使用を研究実施し、トーマス鉄中止後は、石灰粉配合の自溶性焼結鉄に切替え、国産褐鉄鉄、硫酸滓等焼結性不良な原料による悪条件を克服して、自溶性焼結鉄の優位性を確立した。統計的手法並に電子計算機の応用を高炉操業に導入し、操炉特性と要因の相関を分析して、技術の標準化を計り、特に炉内反応の効率と炉頂ガス組成の関係を理論的に解明し、連続ガス分析計の活用に対する指針を与えた。炉頂における装入物分析を調整するため特殊な装入装置を考案設置し炉内の分布を状況に応じて変更することにより、従来極めて困難視され分布異常に対して適切な対策を確立した。アイソトープによる計測技術を導入して、シャフト部並びに炉底部の高炉煉瓦の侵食を測定し前記の炉内ガス流分布の調整あるいは砂鉄使用による炉床部保護の対策と相俟つて、高炉耐火物保護、炉命の延長に有効な基準を与えた。また薄壁式高炉における朝顔、または炉底の冷却に独自の技術を確立し、炉命延長と建設費の節約に有効な炉体型式を完成した。

以上のとおり君は製鉄技術の進歩発展に貢献したところ多大であり表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

### 渡辺義介記念賞受賞者

富士製鉄株式会社広畑製鉄所技術管理部長

平 本 清 房 君

鋼板冷間圧延技術に対する貢献

君は、昭和5年3月広島高等工業学校電気科卒業後、八幡製鉄所に入所以来現在に至るまで実に30年余にわたる間終始一貫して鋼板製造関係の業務に従事した。殊に八幡製鉄所の鋼板製造については常に創意工夫と研鑽を致し、優秀なる技術者として現場第一線に活躍し部下を指導督励した。

昭和16年9月製鋼部第一圧延課薄板掛長、その後昭和17年6月本社作業局勤務となり圧延部門を担当爾来終戦に至る間戦時下至難の各作業所の適正なる圧延計画に尽瘁するなどよくその職責を完うした。昭和25年4月富士製鉄本社圧延課長となり次いで昭和27年8月広

畑製鉄所製鋼部主任課長となる。時を同じくして同所第一次合理化計画に直面し薄板工場建設に専心、また薄板工場完成に先だち、越えて昭和28年5月6日より10月31日にいたる間冷間圧延技術習得のため、アメリカ合衆国アメリカンローリングミル会社のミドルタウン工場に派遣され、冷延関係の設備並びに製造上における諸種の調査研究を詳さにおこない帰朝、昭和28年11月製鋼部臨時冷延課長となる。昭和29年2月畑製鉄所製鋼部冷延課長となり、同月薄板工場を完成し、磨薄板の大量生産により一般民需産業の発展を助長した。昭和32年1月冷延部副長、同34年2月畑製鉄所冷延部長となる。その間畑製鉄所第二次合理化計画により冷延部門を担当しわが国最初の6フィート幅コールド・レバシングミルを建設するなど、従来より専ら米国に輸入を依存していた自動車用広幅冷延鋼板の製造にまた非時効性深絞り鋼板などの高級品種国産化に成功した。かくのごとく諸種の冷延鋼板の大量生産により最近のわが国、自動車業界あるいは家庭用電機器具、一般民需等の各種産業界の飛躍的な発展に寄与したことは実に大なるものがある。

以上のごとく君は鋼板の冷間圧延技術の進歩発達に対する功績が多岐であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

#### 渡辺義介記念賞受賞者

八幡製鉄株式会社八幡製鉄所製鋼部  
第五製鋼課長

工学士 前原 繁君

#### 純酸素転炉法の研究、建設および操業

君は昭和21年京都大学工学部冶金学科大学院前期を修了し、同年7月日本製鉄株式会社入社八幡製鉄所技術研究所に勤務、高炉用鉬石の焼結に関する研究およびノデュラー用鉄鉄に関する研究をおこない優秀な研究成果を挙げた。その後昭和27年から転炉製鋼法の研究をおこない、特に昭和29年から31年に至る間5tトン試験転炉によるわが国最初の横吹および上吹転炉操業における純酸素転炉の炉型、脱燐脱硫、鋼中窒素、鋼中酸素に関する研究は純酸素転炉法の優秀性を明らかにしたことは現在の同法の隆盛を予見させたものとして高く評価される。更に昭和30年から建設局転炉設備掛長として純酸素転炉の建設に専念し、31年オーストリアに出張、操業法を習得し32年9月本邦最初の大型純酸素転炉の稼働を成功させた。33年第1回国際LD会議に出席、その後引続き転炉掛長、34年第五製鋼課長として操業の合理化につとめ、炉材品質の向上に協力し月産64,700t、炉寿命455回という優れた成績を挙げた。さらに溶製鋼種の拡大にも力を注ぎ厚板材、硬鋼線材、高張力鋼等多品種を優秀な品質にて生産することに成功した。一方第五製鋼課長としては電気炉の大量生産方式によるステンレス鋼の溶製にも努力し、これを生産規模にのせた。

このように君は純酸素転炉法の草創期から研究をおこない建設、操業さらには溶製鋼種の拡大に力を注ぎ、この方法の完成に多大の成果を挙げた。よつて君は表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

#### 渡辺義介記念賞受賞者

日本鋼管株式会社新潟電気製鉄所製造課

職長 山 外次郎君

#### フェロアロイ製造作業に対する貢献

君は、昭和4年12月日本鋼管株式会社富山電気製鉄所電気炉工として入社、新潟電気製鉄所伍長、組長を経て職長となり現在に至っている。

君は、この間30余年終始一貫フェロアロイ電気炉の現場作業員として、初期の自冷式電極使用の電気炉からブロック電極電気炉、セミゼーダーベルグ式電気炉、密閉式電気炉にいたる間、常に現場作業の中心となり、困難な新設備操業条件の決定、ならびに現場の諸問題の解決に尽力し、卒先作業員の指導をおこない、電気炉操業の確立ならびに発展に貢献した。社内では精励格勤による表彰10回、フェロアロイ操業改善による表彰、生産新記録による表彰等10数回にわたり受けている。特に昭和29年7月日本最初のフェロマンガン用密閉式電気炉の操業開始に当つては、よくその作業態勢を確立した。昭和34年においては、新潟電気製鉄所のフェロシリコン生産合理化において豊富な経験と創意を生かし、電力原単位9000kWh/tなる画期的な成果を樹立した。

以上のとおり君は電気炉作業員として、フェロアロイ製造作業の確立ならびに進歩発達に貢献するところ多大で表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。

#### 渡辺義介記念賞受賞者

日新製鋼株式会社呉工場品質課長

工学士 山本大作君

#### 帯鋼および切板の品質管理体系の確立に対する功績

君は、昭和18年早稲田大学理工学部冶金学科卒業後昭和23年九州大学工学部大学院前期3年を終了、直ちに日垂製鋼株式会社に入社、31年12月日新製鋼呉工場品質管理課長となり現在に至っている。

昭和28年8月同社帯鋼工場の作業開始以来帯鋼の寸法、表面肌、機械的性質と製鋼圧延の作業条件の相関を解明した。引続き同工場独特の管理体系の確立により数百に上る切板の仕様に応じて製造、検査、使用者側の成績を一元的に管理する体系を建て、品質を向上せしめた。また昭和33年以降、中国鉄鋼業協会の管理部会主査として中国地方業界の管理技術の研究を推進し成果をあげている。

以上の如く君は、帯鋼および切板の品質管理体系の確立に対する功績が多岐であつて、表彰規程第8条の規定により渡辺義介記念賞を受ける資格十分であると認める。



# 昭和35年度(昭和35年3月1日から昭和36年2月28日まで)事業報告および会計報告

## 事 業 報 告

### I. 会 議

本会運営上の会議をつぎの通り開催した。

#### 1. 総 会

第 45 回通常総会 35年 4 月 1 日開催

議事

- (1) 理事, 監事および評議員選挙 (別掲の通り当選者決定)
- (2) 昭和 34 年度事業報告, 収支決算並びに財産目録の件 (承認可決)
- (3) 昭和 35 年度事業計画並びに収支予算の件 (承認可決)

#### 2. 評議員会

昭和 35 年度第 1 回評議員会 35年11月1日開催  
議事 理事 1 名補欠選任の件 (名児耶馨君選任)

- 昭和 35 年度第 2 回評議員会 36年 2 月 16 日開催
- 議事 (1) 三島徳七, 山岡 武両氏を名譽会員に推挙の件 (承認可決)
- (2) 次期理事, 監事, 評議員候補者推薦の件 (候補者推薦決定)
  - (3) 昭和35年度事業報告, 収支予算並びに財産目録の件 (承認可決)
  - (4) 昭和36年度事業計画並びに収支予算の件 (承認可決)

#### 3. 理事会

35年 3 月 25 日, 4 月 1 日, 4 月 22 日, 5 月 17 日, 6 月 15 日, 7 月 26 日, 9 月 8 日, 10 月 18 日, 11 月 15 日, 12 月 16 日, 36年 1 月 16 日, 2 月 16 日の 12 回開催し, 毎月の事務びに会計事項, 会員の入退会その他一般会務を協議決定した。

#### 4. 編集委員会

35年 3 月 22 日, 4 月 26 日, 5 月 24 日, 6 月 24 日, 25 日, 7 月 19 日, 8 月 30 日, 9 月 20 日, 10 月 25 日, 11 月 22 日, 12 月 22 日, 36年 1 月 11 日, 2 月 10 日の 12 回開催し, 会誌の編集方針, 企画, 掲載論文の選定, 技術資料の蒐集その他会誌編集に関する一切の事項を協議処理した。

#### 5. 企画委員会

35年 3 月 29 日, 5 月 10 日, 6 月 7 日, 7 月 12 日, 9 月 13 日, 10 月 24 日, 11 月 10 日, 12 月 13 日, 36年 1 月 13 日, 2 月 7 日の 10 回開催し, 事業運営上の諸企画につき審議立案した。

#### 6. 支部長会議

35年 4 月 2 日開催, 本部の事業計画の説明並びに各支部の事業状況の報告があり, 協会発展に関する件, 本部支部間連絡に関する事項等につき協議した。

### II. 会 員

本年度においてつぎの通り会員の異動があつた。

異動	名譽 会員	賛助 会員	維持会員	正 会 員	学 生 会 員	外 国 会 員	合 計	会 員 団 体 数
昭和35年 3月1日 現在	20	33	180 (895)	6,024	312	31	6,600	82
入 会			+26 (+38)	+435	+213	+ 10	+684	
退 会			-2 (-11)	136	-9		-147	
死 去	-1	-1		-13			-15	
転 格				+105	-105			
昭和36年 1月31日 現在	19	32	204 (922)	6,415	411	41	7,122	82

名譽会員桂井三君36年1月25日死去

### III. 役員および常置委員

本年度においてつぎの通り役員および常置委員の異動があつた。

#### 1. 理 事

35年 4 月 1 日開催の第45回通常総会において任期満了の理事の改選を行ない, つぎの通り当選, 就任した。  
秋田武夫君 浅田長平君 池田正二君 近藤八三君  
佐藤忠雄君 長谷川正義君 三井太佑君  
同日開催の理事会において互選によりつぎの通り当選就任した。

会 長 浅田長平君

副会長 作井誠太君

35年 7 月 14 日理事池田正二君死去。

35年11月1日開催の第1回評議員会において理事 1 名の補欠選挙を行ない, 名児耶馨君当選就任した。

#### 2. 監 事

35年 4 月 1 日開催の第45回通常総会において任期満了の監事の改選を行ない, つぎの通り当選就任した。

石原善雄君

#### 3. 支部長

35年 9 月 10 日東北支部長伊藤正夫君辞任, 後任に綾部先君当選就任した。

35年 3 月 12 日東海支部長佐野幸吉君任期満了退任, 後任に佐藤知雄君当選就任した。

#### 4. 評議員

35年 4 月 1 日開催の第45回通常総会において任期満了の評議員の改選を行ない, つぎの通り当選, 就任した。

青木不二男 葦沢 大義 網谷 俊平 綾部 先  
荒木 透 石田 四郎 井関 剛 伊藤 五朗  
茨木 正雄 今井勇之進 井村 荒喜 岩井雄二郎  
岩瀬 慶三 内川 悟 太田 久男 大元 博  
岡田 知彦 荻野 一 奥村 福次 小田原大造  
小野 清造 小野田武夫 金森 九郎 川崎 勉  
菊田多利男 北川 一栄 木下 茂 黒田 泰造

小平 俊雄 小林佐三郎 西郷 吉郎 雀部 高雄  
 佐野 幸吉 寒川恒一郎 篠原 武司 志村清次郎  
 菅野 猛 園田 一夫 高尾善一郎 武田 喜三  
 武田 修三 田中 国雄 谷口 光平 谷村 潔  
 千葉 茂 出淵 国保 中島 省一 中安 閑一  
 中山 育雄 西村吉太郎 野島福太郎 橋本 宇一  
 藤川 一秋 藤木 俊三 藤村 哲之 藤本 一郎  
 堀田 秀次 堀田 之孝 松永陽之助 松原与三松  
 箕田 貫一 皆川 孝光 宮代 彰 毛利 定男  
 森 曉 森 竜郎 森棟 隆弘 八木貞之助  
 柳 武 山本 信公 湯川 正夫 吉井 周雄  
 吉崎 鴻造 和田 亀吉 渡辺 博史

36年1月4日評議員木村富士信君、2月10日評議員川手寿夫君死去。

#### 5. 常務委員

35年5月1日常務委員をつぎの通り委嘱した。

小野田武夫 菊池 浩介 平世 将一 前田 元三  
 松下 幸雄 松本 豊 山内 二郎 吉田 道一  
 (以上重任)

武田 喜三 吉崎 鴻造 内山 道良 小野 六郎  
 (以上新任)

35年8月25日名兎耶馨君を常務委員に委嘱した。

35年9月9日池上卓穂君を常務委員に委嘱した。

35年10月27日俵隆治君を常務委員に委嘱した。

35年11月16日安原武彦君を常務委員に委嘱した。

35年12月19日藤本一郎君を常務委員に委嘱した。

#### 6. 編集委員

35年5月1日編集委員をつぎの通り委嘱した。

井上 孝 上野 学 菊地 敏治 草川 隆次  
 小犬丸胤男 沢 繁樹 藤田 利夫 堀川 一男  
 山木 正義 山田 繁 (以上重任)

野崎 善蔵 藤井 行雄 桑原 康長 沖 進  
 中村 正久 阿部 秀夫 若松 茂雄 中山 忠行  
 (以上新任)

35年10月19日桑原康長君辞任、後任に安藤卓雄君を委嘱した。

35年11月16日井上孝君辞任、後任に戸田健三君を委嘱した。

#### 7. 企画委員

35年5月1日企画委員をつぎの通り委嘱した。

石渡 鷹雄 一戸 正良 久芳 正義 鶴瀨 浩  
 木下 亨 知崎 喬 野村 純一 (以上重任)

35年5月11日企画委員をつぎの通り委嘱した。

藤井東蒙男 矢野 武夫

### IV. 一般事業

本年度における事業の概要はつぎの通りであつた。

#### 1. 会誌

「鉄と鋼」第46年第3号から第47年第2号まで12冊(うち第3号および10月号は講演前刷)を発行した。なお臨時増刊としてつぎの2冊を発行、会員に配布した。

第8号 鉄鋼技術共同研究会製鋼部会鑄型分科会報告書

第13号 鉄鋼技術共同研究会特殊鋼部会報告書

また別に、製鋼部会鑄型分科会報告書(別冊)資料篇

を発行した。

#### 2. 刊行物

Tetsu-to-Hagané Abstracts No.9 (1959年)、No.10 (1960年)は発行済

日本鉄鋼連盟の賛助により、さらに Tetsu-to-Hagané, English Edition (年4回発行)を発行することとし目下準備中。

#### 3. 鉄鋼技術講座の編集

「使用者のための鉄鋼技術講座」編集の目的をもつて32年7月に編集委員会を設け、鋭意編集の事業に当り既に第5巻まで完成発行し、目下第6巻の刊行を進めている。

第1巻 製鉄製鋼法

第2巻 鋼材製造法

第3巻 鋼材の性質と試験

第4巻 鋼材加工法

第5巻 鑄鉄の性質と加工

第6巻 鉄及び鋼材の規格と解説

#### 4. 鉄鋼便覧の改編

鉄鋼便覧は既に改編4版を重ねたが、更に新事態に應ずるため改編に着手することとなり、33年7月改編委員会を設置、刊行の準備を進めたので、既に原稿も全部纏まり、目下印刷の準備中。

#### 5. 原子力研究委員会

原子力工業の発展に対応する鉄鋼生産技術の育成に必要な調査研究を行なうことを目的として32年7月に設置された本委員会は、爾後度々会合を開いて調査研究を行ない、またその内に文献専門委員会を設けて関係文献の蒐集頒布に努めている。

#### 6. 鉄鋼技術共同研究会

鉄鋼技術共同研究会(通産省重工業局、日本鉄鋼連盟および本会の三者共同組織)は、製鉄、製鋼、鋼材、特殊鋼、熱経済技術、品質管理、調査、新技術開発の8部会に分れ、各部会はまた夫々分科会分に分れて研究事項を分担、引続き活発な調査研究を行なっているが本年度においては更に計測および鉄鋼分析の2部会を設け、一層その事業活動を推進した。

#### 7. 講演会、見学会および座談会

(1) 春季講演大会および見学会

35年4月1日から3日まで3日間東京大学工学部において開催、研究発表講演125、特別講演5。

4月4日日本金属学会と共同で10班に分れ、川崎製鉄千葉製鉄所ほか23カ所の工場、研究所などの見学を行なつた。

(2) 秋季講演大会および見学会

35年10月3日から5日まで3日間北海道大学工学部において開催、研究発表講演174。

11月6日、7日の両日日本金属学会と共同で4班に分れ札幌、苫小牧、室蘭各地の工場、鉱山などの見学を行なつた。

(3) 特別講演会

35年4月1日東京大学工学部において、服部賞ほか各賞受賞者の特別講演会を開催。

講演 特殊鋼の過去と将来

渡辺義介賞受賞者 石原米太郎 君

## 新しい鋼材製品について

服部賞受賞者 嶺 次男 君  
日本鋼管における転炉製鋼法の推移概況に  
ついて 香村賞受賞者 木下 恒雄 君  
脱炭反応の速度論的研究について

俵賞受賞者 藤井 毅彦 君  
耐食耐熱高合金鋼の研究

渡辺三郎賞受賞者 水野 誠 君

35年10月3日札幌市北海道大学クラーク会館において  
開催。

## 講演 最近の欧州の鉄鋼情勢

通産省通商局 三井 太佑 君  
日本原子力の現状と将来

日本原子力研究所 西堀栄三郎 君

35年12月7日東京都立産業会館において開催

## 講演 ソ連産業を視察して

東都製鋼東京製鋼所製造部長 山木 正義 君  
中国の鉄鋼事情

東洋鋼鋳取締役技術部長 吉崎 鴻造 君

## (4) 座談会

35年6月21日東京都神田錦町学士会館において開催,  
橋本金属材料技術研究所長ほか民間各研究所の7氏出  
席, 鉄鋼技術研究体制をテーマとする第2回の座談会  
を開催した。

## (5) その他

他学協会との共催にてつぎの通り開催した。

第10回品質管理大会

第3回自動制御連合講演会

塑性加工講演会およびシンポジウム

第5回金属材料の強度および疲労に関する総合シン  
ポジウム

第2回原子力研究総合発表会

第4回材料試験連合講演会

## 8. 表彰

昭和35年4月1日第45回通常総会において表彰式を行  
ない, 鉄鋼技術の功労者に対し下記の賞を贈り表彰し  
た。

服 部 賞 嶺 次男君

香 村 賞 木下 恒雄君

俵 賞 藤井 毅彦君

渡 辺 三 郎 賞 水野 誠君

渡 辺 義 介 賞 石原米太郎君

渡 辺 義 介 記 念 賞 荒木 透君 一戸 正良君

井上 繁弘君 上嶋 熊雄君

尾崎 利雄君 工藤 重蔵君

竹本 国一君 谷口 千之君

持館 英康君 安田 洋一君

山田 貞雄君 若松 茂雄君

## 9. 鉄鋼標準試料の分譲

従来に引続き鉄鋼標準試料の分譲を行なっているが,  
需要増加のため品切を生じ, 分譲に支障を来たしたの  
で, 鉄鋼標準試料委員会において対策を研究, 製造依頼  
先の増加, 分析の促進等に努力したので, その後製造分  
析ともに着々進行し, 22種の試料を整備, 分譲の求めに  
応じ得ることとなり, 本年度における分譲数 707 本に

達した。現在八幡製鉄, 富士製鉄, 日本鋼管, 住友金属工  
業, 日立金属工業の5社は試料の製造を分担し, また東  
京大学, 名古屋大学, 東北大学金属材料研究所, 理化学  
研究所および八幡製鉄, 富士製鉄, 日本鋼管, 住友金属  
工業, 日本製鋼所, 日本特殊鋼, 日立金属工業各社の研  
究機関は試料の分析を担当し, この事業に多大の協力援  
助を与えている。

## 10. 対外関係

1. 英文 Tetsu-to-Hagané Abstracts No. 9

(1959), No. 10 (1960) を発行し, 米, 英, 仏, 独, 瑞  
典, ポーランド, スペイン, ノルウェー, カナダ, イン  
ド, インドネシアその他の海外諸国の鉄鋼関係学協会,  
大学, 図書館, 研究所, 会社, 商社などに寄贈し, 技術  
の紹介, 交流に資した。

2. 米, 英, 仏, 独, インド, インドネシアその他の  
諸国の鉄鋼会社その他の諸団体と引続き会誌その他の印  
刷物の交換をした。

3. Abstracts 所載論文の原文翻訳の依頼などを初  
め取引の紹介その他の照会幹旋多きを加えたが, これら  
に対して夫々回答を發し, 彼我の意思疏通, 技術の交流  
に資した。

4. さきに外国会員制度を設けたが, 入会者漸次増加  
した。また書店を通じての会誌の海外頒布も増加した。

## V. 八幡製鉄渡辺記念資金による事業

1. 渡辺義介賞および渡辺義介記念賞の贈呈

2. 渡辺記念講演会の開催

北陸, 東海, 関西, 中国四国, 九州の各支部において  
それぞれ渡辺記念講演会を開催した。

3. 海外出張者への調査委託

海外出張者に対しつぎの通り鉄鋼関係事項の調査を委  
託し, その費用を本資金中より支出した。

(1) 欧米各国の鋳物用原料鉄, ロールおよびインゴ  
ットケースの現状

京都大学教授 森田 志郎君

(2) 米国鉄鋼業における新技術開発のための学界と  
企業との協力態勢について

石渡 鷹雄君

(3) 鉄粉の製造法について

東北大学教授 今井勇之進君

4. 鉄鋼技術共同研究会報告書刊行費補助, 製鋼部会  
鋳型分科会報告書並びに特殊鋼部会報告書を“鉄と鋼”  
増刊号として発行するにつき刊行費として百万円を補助  
した。

## VI. 石原研究資金による事業

1. 鉄鋼技術共同研究会への運営費交付

運営費 40 万円を交付した。

2. 原子力研究委員会への研究費交付

研究費 153,195 円を交付した。

3. 石原研究奨励金の交付

鉄鋼に関する研究の振興とその実用化を図るため,  
石原研究奨励金交付の制度を設け, 推薦された多数の  
候補研究中からつぎの2件を選定, 奨励金を交付し  
た。

(1) 鉄鋼の炭化物研究 金 25 万円

東京大学大学院 谷野 満君

(2) 高速衝撃における鉄鋼の挙動に関する研究  
金 20 万円

東京工業大学教授 作井 誠太君  
同 助教授 中村 正久君

Ⅶ. 地方支部

北海道支部, 東北支部, 北陸支部, 東海支部, 関西支部, 中国四国支部, 九州支部の各支部においても, 夫々講習会, 見学会, 研究会, 講演会等を開催した。

Ⅷ. 官庁事項

1. 昭和35年7月8日 昭和34年度事業報告, 収支決算書, 昭和35年度事業計画, 収支予算書および第45回通常総会報告を文部大臣に提出した。

2. 昭和35年7月8日 理事の登記変更および資産総額に関する登記変更申請を東京法務局日本橋出張所に提出, 登記を了した。

3. 昭和35年11月1日理事の登記変更申請を東京法務局日本橋出張所に提出, 登記を了した。

会 計 報 告

一般会計収支決算

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前年度繰越	379,854円	会 誌 費	8,604,391円
会 費	9,405,588	印 刷 費	6,880,795
維 推 会 員	2,924,500	編 集 費	580,636
正 学 生 会 員	6,101,766	送 付 費	1,142,960
外 国 会 員	216,927	刊 行 費	1,558,484
入 会 金	60,245	アブストラクト	619,767
大会参加費	102,150	鉄 鋼 技 術 講 座	751,052
分 譲 収 入	520,900	鉄 鋼 便 覧	18,385
会 誌 類	783,390	鉄 経 済 そ の 他	169,280
会 員 名 簿 そ の 他	13,653	会 合 費	951,525
鉄 鋼 標 準 試 料	924,100	会 議 費	264,601
刊 行 収 入	961,114	総 大 会	635,003
鋼 の 熱 処 理	217,568	講 演 会 ・ 座 談 会	28,370
鉄 鋼 製 造 法	210,132	研 究 調 査 委 員 会	23,551
鉄 鋼 技 術 講 座	339,500	支 部 補 助 金	176,000
熱 経 済 そ の 他	193,914	人 件 費	4,869,081
廣 告 収 入	5,480,900	俸 給 及 手 当	3,771,994
利 子 収 入	43,384	旅 費 及 謝 礼	271,400
雜 収 入	30,637	厚 生 費	125,687
会 誌 刊 行 補 助 金	1,000,000	退 職 積 立 金	700,000
合 計	19,543,520	事 務 費	2,194,776
		借 室 料	612,000
		筆 紙 墨, 通 信 費	630,119
		交 通 費	263,180
		図 書 及 什 器 費	181,245
		鉄 鋼 試 料 諸 費	99,260
		振 替 貯 金 手 数 料	173,702
		會 員 団 体 報 償 費	235,270
		次 年 度 繰 越	1,189,263
		合 計	19,543,520

別途会計収支決算

資 金 別	収 入		支 出	
	費 目	金 額	費 目	金 額
表彰並びに事業資金		283,883		283,883
	前年度繰越	192,154	表 彰 費	94,490
	本年度利子	91,729	次 年 度 繰 越	189,393
八幡製鉄度辺記念資金		1,957,729		1,957,729
	本年度繰越	1,140,291	表 彰 開 費	290,000
	本年度利子	817,438	念 講 演 会 調 査 費	100,000
			海 外 事 情 委 託 調 査 費	400,000
			鉄 鋼 技 術 共 同 研 究 会	1,000,000
			報 告 書 刊 行 補 助 費	167,729
			次 年 度 繰 越	
石原研究資金		1,388,346		1,388,346
	前年度繰越	623,183	石 原 研 究 奨 励 金	450,000
	本年度利子	765,163	鉄 鋼 技 術 共 同 費	400,000
			研 究 会 運 営 費	153,195
			原 子 力 研 究 委 員 会	385,151
			次 年 度 繰 越	
基 本 金		1,208,555		1,208,555
	前年度繰越	1,122,774	次 年 度 繰 越	1,208,555
	本年度利子	85,781		
職員退職資金積立金		2,805,339		2,805,339
	前年度繰越	1,981,757	職 員 退 職 手 当 支 給	721,000
	本年度利子	123,582	次 年 度 繰 越	2,084,339
	本年度積立	700,000		
会館資金積立金		4,768,146		4,768,146
	前年度繰越	4,475,569	次 年 度 繰 越	4,768,146
	本年度利子	292,577		

財産目録

別途資金財産目録明細

項 目	金 額	項 目	金 額
(資産之部)	円	表彰ならびに事業資金	1,395,393円
什 器	820,000	三井信託銀行信託預金	500,000
電 話	49,800	三菱信託銀行 "	300,000
図 書	45,000	安田信託銀行 "	200,000
借 室 敷 賃	153,000	住友信託銀行 "	200,000
電 分 認 印 刷 物	60,000	三 菱 銀 行 普 通 預 金	189,393
鉄 鋼 標 準 試 料	140,000	野 田 文 庫 図 書 器	4,000
三 菱 銀 行 普 通 預 金	3,300	什	2,000
日 本 勸 業 銀 行 "	93,405	八 幡 製 鉄 度 辺 記 念 資 金	10,167,729
東 海 銀 行 "	553,040	三井信託銀行信託預金	2,500,000
振 替 貯 金	286,046	三菱信託銀行 "	2,500,000
現 金	232,803	安田信託銀行 "	2,500,000
	23,969	住友信託銀行 "	2,500,000
		日 本 勸 業 銀 行 普 通 預 金	167,729
合 計	2,460,363	石 原 研 究 資 金	10,385,151
		大 和 銀 行 信 託 預 金	10,000,000
		大 和 銀 行 普 通 預 金	385,151
別 途 資 金 財 産	30,009,313	基 本 金	1,208,555
		三井信託銀行信託預金	1,208,555
		職 員 退 職 資 金 積 立 金	2,084,339
		安田信託銀行信託預金	2,084,339
		会 館 資 金 積 立 金	4,768,146
合 計	32,469,676	三 菱 信 託 銀 行 信 託 預 金	4,768,146

昭和36年(昭和36年3月1日から昭和37年2月28日まで)事業  
計画ならびに収支予算

事業計画

<b>I. 会議</b>			
通常総会	1回	4月	
評議員会(定例)	1回	2月	
理事会(定例)	12回	毎月	
支部長会議	1回	4月	
<b>II. 委員会</b>			
編集委員会(定例)	12回	毎月	
企画委員会(定例)	12回	毎月	
鉄鋼標準試料委員会		随時	
工業規格委員会		随時	
原子力研究委員会		随時	
同文献専門委員会	8回	随時	
特別資金運営委員会		随時	
表彰選考委員会		随時	
<b>III. 集会</b>			
春季講演大会および見学会(東京地区)	1回	4月	
秋季講演大会および見学会(東北地区)	1回	10月	
講習会	2回	随時	
講演会	4回	随時	
座談会	2回	随時	
鉄鋼技術共同研究会(重工業局, 鉄鋼連盟と共同)			
実行委員会	2回	4月, 10月	
製鉄, 製鋼, 鋼材, 特殊鋼, 計測, 熱経済技術, 品質管理, 調査, 新技術開発, 鉄鋼分析, 各部会並びに分科会		随時	
品質管理大会(他学会と共同)	1回	6月	
自動制御連合講演会(他学会と共同)	1回	6月	
塑性加工講演会(他学会と共同)	1回	12月	
金属材料の強度および疲労に関するシンポジウム(他学会と共同)	1回	4月	
原子力総合講演会(他学会と共同)	1回	2月	
材料試験連合講演会(他学会と共同)	1回	10月	
<b>IV. 表彰</b>			
服部賞, 香村賞, 俵賞, 渡辺三郎賞			
渡辺義介賞, 渡辺義介記念賞	1回	4月	
<b>V. 刊行</b>			
会誌“鉄と鋼”	12回	毎月	
同増刊(鉄鋼技術共同研究会調査報告)	2回	随時	
欧文誌	4回	随時	
鉄鋼技術講座(第6巻)		36年5月	
鉄鋼便覧(改編)		36年9月	
会員名簿		36年12月	
<b>VI. 分譲</b>			
鉄鋼標準試料(22種)		常時	
会誌		常時	
会員名簿, 会員章		常時	
<b>VII. 特別資金による事業</b>			
渡辺記念講演会の開催	本部 1回	随時	
	各支部 1回	随時	
海外出張者への調査委託		随時	
石原研究奨励金の交付		随時	

収支予算  
一般会計収支予算

収 入		支 出	
費 目	金 額	費 目	金 額
前年度繰越	1,180,000円	会誌費	9,880,000円
会費	11,270,000	刊行費	7,680,000
維持会費	4,510,000	編集費	600,000
正学生会費	6,340,000	送付費	1,600,000
外国人会費	250,000	刊行費	5,270,000
学外入会費	50,000	欧文誌	4,000,000
	120,000	会誌名簿	300,000
参加出席費	780,000	鉄鋼技術講座	100,000
大会参加費	620,000	鉄鋼便覧	810,000
講習会出席費	160,000	その他	60,000
分譲収入	1,830,000	会合費	1,290,000
会誌類	840,000	会議費	300,000
会員名簿その他	90,000	講演会費	650,000
鉄鋼標準試料	900,000	講習費	120,000
印刷収入	630,000	研究調査委員会	160,000
鉄鋼製造法	40,000	支部補助金	420,000
鉄鋼技術講座	530,000	人件費	6,290,000
熱処理その他	60,000	俸給及手当	5,310,000
広告収入	6,750,000	旅費及謝礼	300,000
調査委託金	30,000	厚生費	180,000
欧文誌刊行賛助金	3,000,000	退職積立金	500,000
利息収入	60,000	事務費	2,240,000
雑収入	60,000	借入金	620,000
合 計	25,590,000	通信費	720,000
		その他	200,000
		の器具費	200,000
		鉄鋼試料	150,000
		振替貯金手数料	150,000
		会員団体報償費	200,000
		雑費	200,000
		予備費	200,000
		合 計	25,590,000

別途会計収支予算

資 金 別	収 入		支 出	
	費 目	金 額	費 目	金 額
表彰並びに事業資金	前年度繰越	270,000	表彰費	270,000
	本年度利子	180,000	次年度繰越	100,000
八幡製鉄渡辺記念資金	前年度繰越	90,000	表彰費	170,000
	本年度利子	950,000	次年度繰越	950,000
石原研究資金	前年度繰越	160,000	表彰費	370,000
	本年度利子	790,000	記念講演会費	180,000
基本金	前年度繰越	1,140,000	海外事情調査委託費	400,000
	本年度利子	380,000	石原研究奨励金	1,140,000
職員退職資金積立金	前年度繰越	760,000	鉄鋼技術共同研究会運営費	500,000
	本年度利子	2,730,000	原子力研究委員会研究費	400,000
会館資金積立金	前年度繰越	1,290,000	次年度繰越	240,000
	本年度利子	1,200,000	次年度繰越	1,290,000
会館資金積立金	前年度繰越	90,000	次年度繰越	2,730,000
	本年度利子	2,730,000	次年度繰越	5,120,000
会館資金積立金	前年度繰越	2,080,000	次年度繰越	5,120,000
	本年度利子	150,000		
会館資金積立金	前年度繰越	500,000		
	本年度利子	5,120,000		
会館資金積立金	前年度繰越	4,760,000		
	本年度利子	360,000		
		0	次年度繰越	5,120,000